

浅大腿動脈感染性仮性動脈瘤に対し大腿-膝窩動脈バイパスを施行した1例

愛知医科大学病院 血管外科

今枝 佑輔（いまえだ ゆうすけ；33才）

石橋 宏之，杉本 郁夫，山田 哲也，折本 有貴，丸山 優貴，三岡 裕貴，細川 慶二郎

症例は85歳，男性，透析患者．平成29年3月，透析先での採血で炎症反応高値を認め前医入院加療されていた．入院の数日前より左大腿部に疼痛・腫脹および局所熱感を認めており，エコーにて同部位に50mm大の嚢状の構造物と内部に血流を認めたため当院へ転院となった．造影CTの結果，左浅大腿動脈周囲にair像を伴う仮性動脈瘤を認め感染性仮性動脈瘤と診断した．1年前に下部胆管癌疑いに対して胆管ステントが留置されており，胆道感染が契機と推測された．抗生剤加療を開始し，感染瘤ドレナージと自己大伏在静脈による左大腿-膝下膝窩動脈バイパス術を施行した．浅大腿動脈は破綻し大量の血腫と膿汁が貯留していたため，グラフトは感染巣を避ける経路とした．

術後は適宜感染巣のデブリードマンと陰圧創傷療法を行った．創部縮小傾向であり，救肢できたかには見えたが，術後66日目に病棟にて夜間心肺停止で発見され蘇生の甲斐なく失った．

ファクス：0561-62-6841

，電話：0561-62-3311